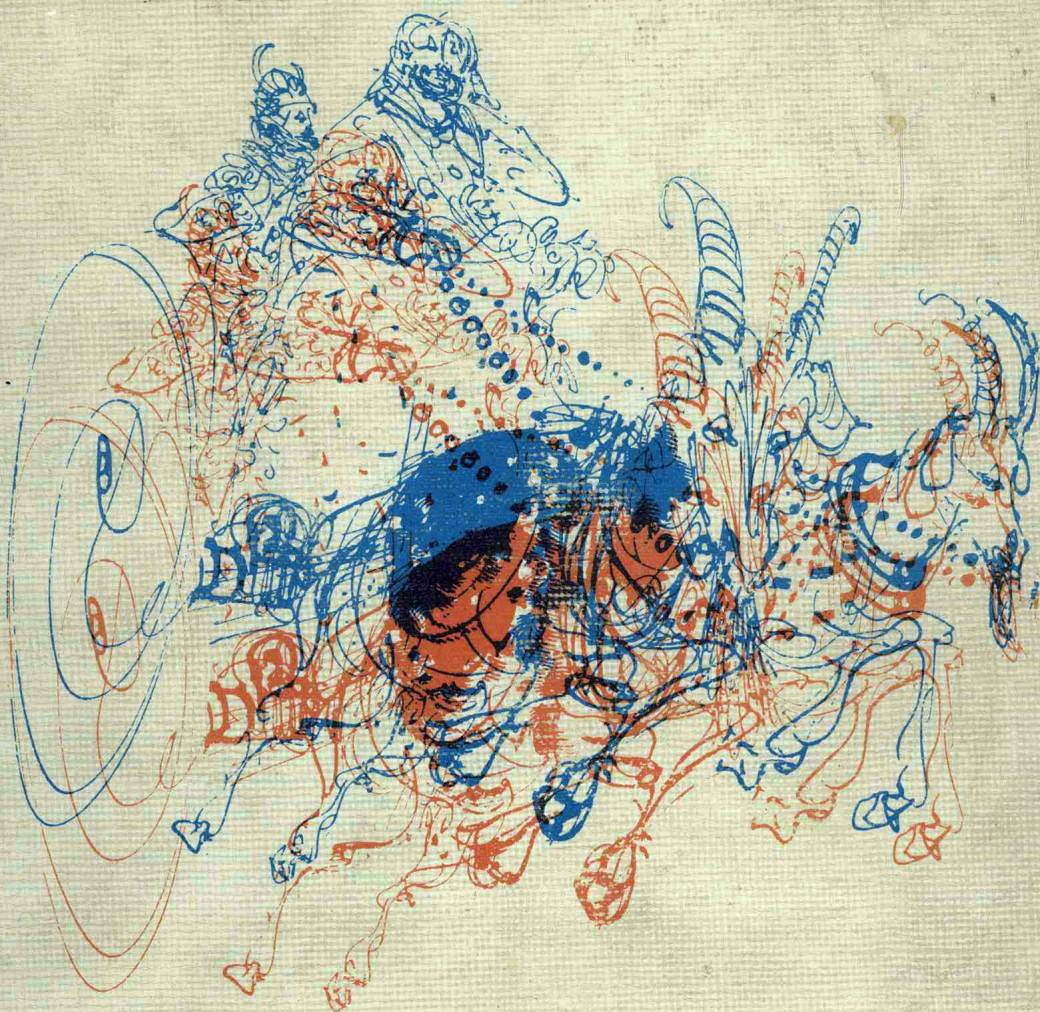


神々のたそがれ

ロジャ・L・グリーン 作 瀬田貞二 訳



© 1971

8397-648 120-1002

神々のたそがれ

ロジャ=L・グリーン

少年少女・新しい世界の文学—20

NDC 933

グリーン,

ロジャ

21cm 278 P

学習研究社



訳者との契約により検印廃止

訳者—瀬田貞二^{せただいじ}

発行人—古岡秀人

編集人—石井和夫

印刷—株式会社 金羊社

製本—有限会社 黒田製本所

発行所—株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4の40の5

郵便番号145

振替東京142930

落丁・乱丁本は
おとりかえ
いたします。

PRINTED
IN
JAPAN

4601

この本についてのお問合わせ、製本上のミスなどがありましたら、下記あてにお知らせください。
学研「営業総務部サービス課」児童図書係 東京都大田区仲池上1の17の15 Tel. 03-754-1111

少年少女・新しい世界の文学

20

神々のたそがれ

ロジャ＝L・グリーン作

瀬田貞二訳



購入年月日

名まえ

学研

THE SAGA OF ASGARD
by Roger Lancelyn Green
Illustrated by Brian Wildsmith
Original English edition published
by Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex
Copyright © 1960
Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

★

訳者紹介

1916年、東京に生まれる。東京大学文学部国文科卒業。平凡社編集部に属しながら、児童文学の創作・評論・翻訳に従事。現在、青山学院女子短期大学講師。「ナルニア国ものがたり」全7巻、「人形の家」(ともに岩波書店)、「まぼろしの子どもたち」(学習研究社)など、多くの訳書がある。

★

さし絵

ブライアン＝ワイルドスミス

★

装丁デザイン

山口はるみ



かみがみ
神々のたそがれ
もくじ

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



宇宙の木イグドラシール

7

知恵をもとめるオージン

27

イズーナのリンゴ

53

ロキと巨人たち

75

ロキのいたずら

88

花嫁フレイア

112

ウトガルドへまねかれたトール

136



オージンの旅^{なま}

156

トロル王^{きう}ゲイローズ

178

エーギルの大なべ

198

バルズールの死^し

213

バーリのあだうち

234

ロキの罰^{ばち}

249

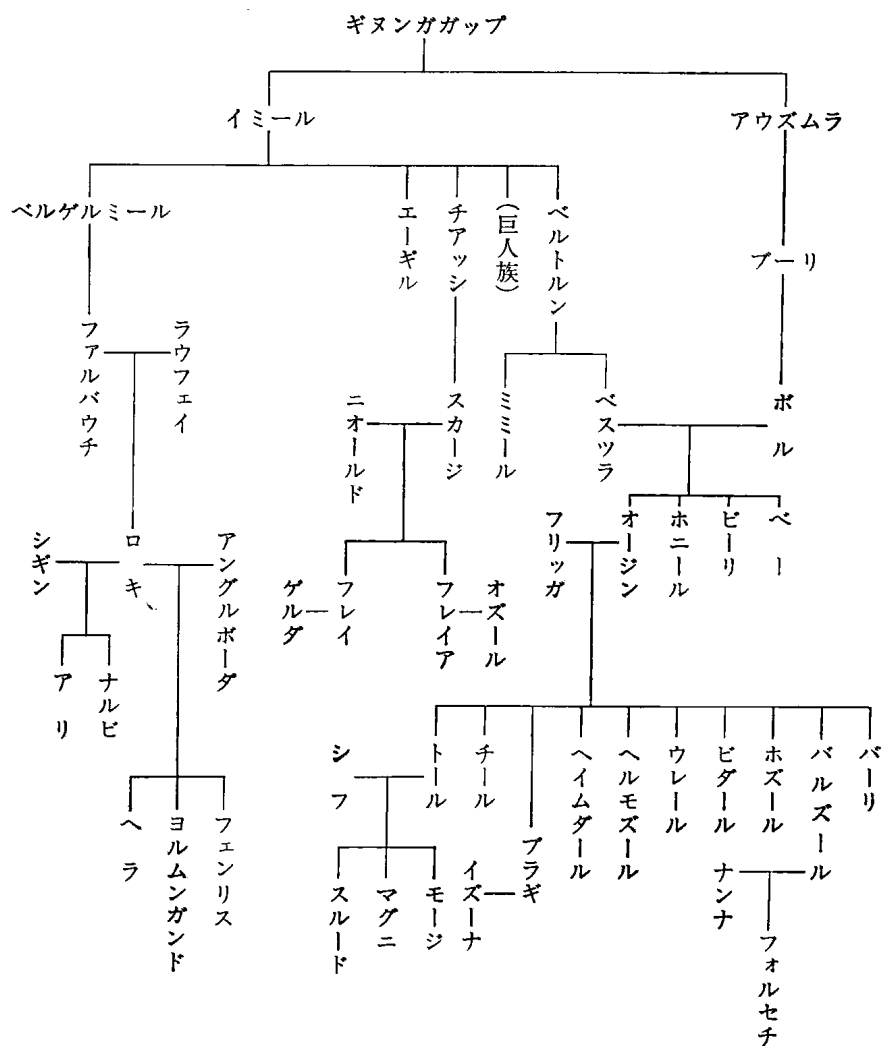
ラグナロークの日

266

訳者あとがき^{やしや}

275

神々と巨人たち



宇宙の木イグドラシール

北の地方は、夏が短くて、冬は長く、また寒い。生きることは、自然のきびしい力にはむかう、たえざる戦いである。自然のきびしさ、すなわち、寒さとやみ、冬の氷雪と寒風、緑の草木のそだたない岩地、そしてくらい山々とオオカミのうろつく谷間にむかつて、生きなければならぬ。

ずっとむかし、この北方の地に暮らした人々は、男も女も、なんとかして生きのびていこうとして、強くなり、またじっとたえしのぶことをおぼえた。人々は、大地の農夫であつたが、どうじにまた、オオカミたちと戦い、オオカミよりただけしい人間たちと戦う戦士でもあつた。おそろしいよそ人たちは、山地をこえてくだってくるが、海辺の深い入り江やフィヨルド（北欧独特）からのぼってくるかして、人々の家を焼き、宝物をうばい、食料をぬすみ、ときには、人々の妻やむすめたちをかすめとっていった。

戦うべきおそろしいけものや、けものよりおそろしい人間がいなときにはまた、天地自然が、風と霜と雪を武器として人々におそいかかる巨人たちのように思われた。北方の地は、すこしのぞみもからしつくす、きびしい世界だつた。とはいえ、そこには愛とほこりがあり、勇気とたえしのぶ心があつた。また、おもしろいふるまいがおこなわれ、それを歌にうたう詩人たち、

スカルドとよぶ吟遊詩人のむれもいて、そのために英雄たちの名がほろびなかったのである。英雄たちのふるまいが、歌や話になってつたえられたように、神々のことも語りつがれた。神、つまりエーシル神族は、そもそも天地のはじめにあたつて、いまもなおがんばっているあの、氷と霜、雪と水の巨人たちと、はげしい戦いをしてきた。

北方の人々の信ずるところでは、この世のはじめには、いま見るような大地はなくて、ただギンガガップという、大きながらんどろがひろがつていた。そのがらんどろの中に、まず霧がただよつてきて、一つの深いみぞを残したまま、その南がわに火の国ムスベルヘイム、その北がわに霧の国ニフェルヘイムをわけへだてた。

宇宙の南のはてには、火魔スルツールが、炎の剣をにぎつてすわり、ほろびの日がくれば、立ちあがつて、神々をも人間たちをもすべて焼きほろぼそうとかまえていた。

深いギンガガップのおく底には、いのちの泉フベルゲルミールがあつて、泉からかずかずの川が流れだし、北方のきびしい寒気が、川水をさくさくの氷片に凍らせた。

年月がたつうちに、その氷片がいのちの泉の上へしだいに積みかさなつて、ついにイミールと化した。イミールは、巨人族のうちでいちばん大きな男で、おそろしい霜の巨人族の先祖となり、すべての巨人のみなもととなつた。

イミールにいのちがやどると、それとともに、ふしぎな雌牛アウズムラがあらわれて、その乳

がイミールをやしなつた。するとたちまち、イミールの氷はこまかくくだけちつて、一片一片が霜の巨人たちになり、かれらはのちに、魔女や魔人、人食い鬼や怪物トロールなどになった。

アウズムラにも食べ物が必要だったので、あたりの氷をなめまわすと、氷の中に、フベルゲルミールの泉から流れでてきた、いのちの塩をみつけたした。

はじめて雌牛が氷をなめた日の夕方、まず男の髪の毛があらわれた。なめつづけて二日めの夕方には、顔があらわれた。そして三日めのおわりには、ひとりの男が全身をあらわした。

この男が、エーシル神族のはじめで、ブーリといった。背が高く、力が強く、またたいへん美しかった。ブーリの子は、ボルで、ボルは、巨人族のむすめベスツラを妻とした。この夫妻から生まれたエーシル神たちが、宇宙の木イグドラシールをそだて、この大地をつくつた。

ボルに三人のむすこがあつて、オージン、ビリー、ペーとよぶが、そのうちオージンは、神々の父で、もつともすぐれた神、もつともけだかい神だった。

三人の神々が、もつとも大きな氷の巨人イミールと戦つて、かれをきりたおすと、その傷口からつめたい水がふぎだして、あらゆる霜の巨人たちをおぼれさせたが、ただベルゲルミールという巨人だけが助かった。この巨人は、もの知りで、知恵があるので、オージンが見のがしたものだつた。

ベルゲルミールは、屋根のついた船をつくつて、妻や子たちとひそんでいたから、洪水にのまれないですんだ。

オージンと弟神たちは、イミールのなきがらを、ギヌンガガツプのがらんどうに投げすてた。そして、この巨人のなきがらから、人間の住むこの世ができた。そのつめたい血潮は、海と川になり、肉は土地になり、骨は山になった。石や岩は、イミールの歯だった。

オージンとその子孫の神々は、大地のまわりに大海をめぐらせた。宇宙の木イグドラシールというトネリコの大木がのびひろがって、大地と大海をさだめ、枝々をしげらせて、その上に影を投げかけ、さらに、イミールのつめたい青い骨からできた大空を、ささえ立った。

神々は、火の国ムスヘルヘイムからとびちる火の粉をあつめて、星々をつくった。また火魔スルツールの国からでる金の湯をはこんで、目もまばゆい日の馬車をこしらえあげ、「はやおき」と「ちからもち」という二頭の馬にひかせて、ソールというきれいなおとめを御者として日の道をまわらせた。ソールのまわる前には、マニという美しい少年が、「はやあし」とよぶ馬のひく月の馬車を、あやつって進んだ。

日と月は、速くめぐって、とどまらなかつた。かたときも休もうとしなかつたのは、日と月をくらおうとして、息をきらして大空を追う、それぞれ一びきのおそろしいオオカミがいるため——さいごはどうなるか、それは、「さいごの決戦」の日にさだめられていた。この二ひきのオオカミは、悪魔の子だった。その母は、鉄の木の森に住むわるい魔女で、その父は巨人。そしてふたりの子たちは、すべて人狼やトルドもだった。

オージンは、星々のめぐりをさだめ、日と月で大地を照らしたあと、自分のつくりあげたこの

新しい世界をたちさつた。すでに、巨人たちや魔物たちがオージンにそむいていたので、オージンは、イミールの骨をたくさんつかつて、巨人たちの国ヨーツンヘイムをへだてる長城として、山々をつらねた。それからのち、オージンは、人間たちのためにつくつた国にたちもどつて、そこを中つ国、ミッドガルドと名づけ、ものゆたかに、見るも美しく、かざりはじめた。オージンは、イミールの巻き毛から木々をつくり、まゆ毛で葉と花々をつくつたうえ、空に雲をうかばせて、静かな雨で地上をうるおわせた。

それから、神々の父であるオージンは、人間づくりにあたつた。まず一本のトネリコと一本のニワトコを海辺に植えて、それから、はじめての男と女、アスクとエンブラをこしらえあげた。そして、オージンがふたりに魂をふきこみ、弟神ビーリが、考える力と感ずる力をあたえ、さらにベーが、話すこと、きくこと、見ることのできるものにした。

このふたりから子孫ができて、ミッドガルドに人間がひろがつていった。しかし人間界には罪と悲しみとがふりかかった。それは巨人たちや魔物たちが、男の姿、女の姿になつて、人間たちと結婚し、オージンのもくろみをうちこわしたからだつた。

小人族も、それにくわつて、わざわいを大きくした。小人族は、人間たちに、黄金がすぎになり、すぎになればなるほど権力がほしくなる欲をふきこんだ。小人族は、小さな者たちで、霧の国ニフェルヘイムに住み、また地下の大きな洞穴に住んだ。かれらは、イミールのくされ肉から生まれ、エーシル神によって人間のかたちにされたが、鉄と黄金と宝石を細工する頭と腕にか

けては、人間よりはるかにすばらしい力があたえられていた。

この小人族は、ドウリンを王として、指輪と剣とはかりしれない宝をつくつたり、エーシル神のつかう黄金を地中からほりだしたりした。

それというのは、ミッドガルドをきずいたおりに、かしこいオージンが、堅固で美しい自分の国アースガルドを宇宙の木イグドラシルのこずえの上のほうに、つくつたからだつた。その第一の宮居は、すべて黄金で光りかがやき、「よろこびの宮」グラスヘイムと名づけられた。その宮でオージンは、高い座にすわり、かたわらに妃神の美しいフリツガをしたがえた。

つぎにオージンたち夫婦神は、ふたりの子どもたちである、りつばな男神女神たちの宮居を建てた。子どもにあたる神々は、いずれもやがて、魔物の軍と戦う長いいくさでそれぞれ奮闘することになる。すなわち、雷神のトールと金の髪をもつその妻シフ。若々しくていくさずきな、神々の守り手チール。エーシル神のうちでいちばん美しい神の、かがやかしいバルズールとその妻の、やさしいナンナ。音楽と青春を楽しむ、ブラギとイズーナ。弓の神ウレール。ものいわぬビダール。そのほかの神々の宮居ができた。

アースガルドのまわりには、ぐるりと長い城壁がかこみ、そこに塔と広間と館とが建つた。中央には、美しいイーダの原があつて、ここは、オージンのグラスヘイム宮の前の、よろこびの庭になつた。

日ごとにオージンや神々は、ビフローストの橋をわたつていった。この橋は、地上の人間には



虹と見られるもので、神々はみなこの橋をわたって、イグドラシールの木の根もとの一つにあるワールドの泉におりていった。ただひとり強い雷神トールだけは、自分の重みでかるがるとした弓形の橋をふみこわすのをおそれて、ビフローストをわたらなかつた。トールはあららしい山道をこえていった。巨人たちは、山越しをしてくるト

宇宙の木イグドラシール

ールを見ると、こわがって逃げた。ビフローストの橋が、空にかかってかがやくのは、この橋をわたって巨人たちがアースガルドへこないように、橋のたもとを明るい炎で焼いているためだった。

宇宙の木の根もとのおぐらい陰におりたって、エーシル神たちは会議をひらき、人間たちに手をかしてやることや、巨人たちとの長いいくさにそなえる手だてを、相談した。このトネリコの下、泉のわきに、一軒の美しい館があり、運命を見ぬくノルンの三人姉妹たち、ウルドとベルランデイとスクールドが住んでいた。ノルン姉妹は、神々の父オージンよりも、ものごとを知っていた。というのは、ウルドは、むかしおこったできごとをことごとく見ることができ、ベルランデイは、世界のどこにでも、いまおこっていることがらを知らず、さらにいちばんかしこいスクールドにいたっては、さすがのオージンにもできない、これからさきにおこるはずのできごとを見とおすことが、できたからだった。

ノルン姉妹は、ときに英雄となるべき人の生まれるところにあらわれて、その子の一生の運命の糸をつむぎ、ゆくさをさだめる吉凶の運を贈り物とすることがあった。

姉妹たちは、この世のなりゆきをオージンにおしえ、オージンは、三人からおしえられたことと、自分の知恵とをあわせて、ラグナロークの日のさだめを知っていた。ラグナロークというのは、この世の破滅になるはずの「さいごの決戦」のことで、その日、エーシル神たちとその敵の巨人たちとが、善と悪の勝負をかけて戦いあい、この世のおわりといういたましい結果をまねく

ことにきまっていた。

ノルン姉妹はまた、トネリコのイグドラシールの木のめんどろをみて、日ごとにウルドの泉の水をその大きな根にそそいだ。それは、魔物たちが、たえず宇宙の木をからそうとしていたためだった。はるかニフェルヘイムにもべつの大きな根がはっていたが、ニッドというわるいイノシシが、いつもそこをかじっていたし、ヘビたちもまきついて、かんでいた。その上のほうの大枝には、四ひきのシカたちが走りまわって、若葉をむしっていた。しかし、木のとっぺんには、一わのかしいワシがとまって、なにもかも見まもっていたし、いたずらな赤リスのラタトスクが、幹をつたつてのぼりおりしては、イノシシのニッドとワシのあいだに、いろいろな知らせやうわさをつたえていた。

こういういりくんだふしぎな世界のただ中に、神々の父オージンが、さながら網のただ中にあるクモのようにして、すべてのものに気をくばってすわっていた。その王座は、アースガルドの上にそびえ、「天の岩座」、リドスキアルフと名づけられて、そこにオージンは、二わのなれた大ガラスのフギンとムニンを両方の肩にとまらせ、世界をみそなわしていた。カラスたちのおかげで、オージンは、さまざまのことを知った。カラスたちが、日ごとに世界じゅうをとびまわっては、夕方になると帰ってきて、見きしめたことを神につげたからだだった。フギンは、もの思ひのように速く千里をとび、ムニンは、ものおぼえにかけて万人をこえた。

オージンは、遠くをながめて、巨人たちがヨーツンヘイムの高い山々の陰で、悪事をたくらむ

宇宙の木イグドラシール